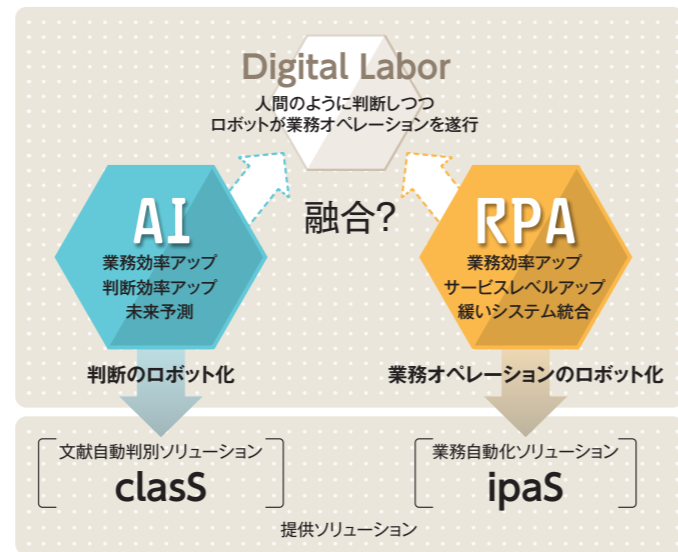


RPAで働き方改革を実現する

ボードやマウスなどの動きを記録し再現するので、世の中の一般的なシステムだけでなく、自社開発のシステムにも対応可能。『特定のブラウザだけ』『オフィスソフトだけ』といった制約はありません。長年使っているオフィスコンピュータ上のシステムとも連携できます。RPAの適用領域は幅広い。例えば、マーケティングなどの分野で日常的に行われる顧客とのコミュニケーションでは、カスタマイズしたメールの文面を作成するといった使い方がある。

「顧客の家族構成などを踏まえたメールの文章を、ipaaSで作成し、

▶デリバリーコンサルティングのソリューションの守備範囲



デリバリーコンサルティング

ホワイトカラーの働き方改革をAIとロボティクスで推進する



働き方改革の必要性が叫ばれる中、企業においてはホワイトカラーの生産性向上が重要課題として浮上している。そこで注目を集めているのが、AI（人工知能）とロボティクスの活用だ。デリバリーコンサルティングは技術進化を取り込み、両方の分野でソリューションを提供している。

RPAが定型業務を自動化システム間連携にも効果

IoT（モノのインターネット）やビッグデータ、AIといった新しいテクノロジーがビジネスを変えつつある。こうした技術を通じて、新しい事業やサービスが次々に生まれている。デリバリーコンサルティングはそんな変化の将来を見据え、さまざまな企業のデジタル変革を生み出している。

「当社は、テクノロジーを活用した価値創造を支援しています。また、テクノロジコンサルティングの経験や知見を生かし、国内外の先端ITツールなどを用いて幅広い分野でソリューションを提供しています。これは一種のオープンイノベーション。当社独自のノウハウと外部の技術を融合させ、お客さまが気付いていない最適解を追究しています」。代表取締役社長の阪口琢夫氏はそう説明する。

同社はIoTやクラウド、プロジェクトマネジメントなどの分野でコンサルティングやシステム・インテグレーションなどのサービスを提供。近年は、ホワイトカラーの生産性向上や働き方改革の支援にも注力している。

「AIやロボティクスが注目されていますが、実際に効果を上げて

読むべき論文を絞り込み研究者の生産性を高める

デリバリーコンサルティングはAIツールとして独自開発の「class」も提供している。文章の中で単語が出てくる頻度、単語の組み合わせ方の傾向などを解析する機械学習モデルを搭載したclassは、主として研究分野で活用されている。

研究者は日々、自分の研究テ

いる企業は少ないのが実情です。しかし、今後の可能性は大きい。特にホワイトカラーの生産性向上を目指す上で、大きな力になると考えています」と阪口氏は語る。

AIが脳の役割を担うとすれば、ロボティクスは手足に相当する。デリバリーコンサルティングはこれらの技術を組み合わせ、オフィスの生産性向上を提案している。主にロボティクスを活用したオフィス業務改革のメソッドとして、注目を集めているのがRPA（ロボティクス・プロセス・オートメーション）である。オフィス業務におけるロボティクスの適用分野は大きく二つ挙げられる。

「まず、非定型業務の自動化です。いったん、パソコン（PC）の操作、キーボードやマウスなどの使い方を覚えさせれば、何度でも正確に同じ操作を繰り返します。業務システムで人手に頼らざるを得ない転記作業などは、自動化ツールで代替できます。非定型業務をツールに任せて、貴重な人材をコア業務に集中させる。現場力の向上を通じて、商品・サービスの付加価値や業務の生産性を高めることができます」

もう一つの適用分野がシステム間の連携だ。システム連携手法としてはEAI（企業アプリケーション

将来的には、ipaaSとclassを組み合わせた活用も視野に入る。

AI機能を持つclassが判断プロセスを担うことで、非定型業務と定型業務が混在するプロセスの自動化も可能になる。

ロボティクスやAIは、今後のオフィスワークを大きく変えるだ

ン統合)が知られているが、かなりのコストと手間がかかる。そこで、比較的簡便な方法として、ロボティクスが活用され始めている。「通常、既存システムと新規開発したシステムを密に連携させるためには、EAIなどを活用した「ハード」な統合が求められます。ただ、二つのシステムから出てくるレポートを合体させたいといった単純な要件であれば、ロボティクスでも十分可能で、少ないコストで済みます。ハイエンドのシステム連携がEAIの領域だとすれば、いわば「緩い」システム連携ではロボティクスが有力な選択肢となるのです」

カスタマイズメール作成、情報収集など多様な用途

デリバリーコンサルティングが提供するRPAソリューションの中核を成す自動化ツールが「ipas」である。業務オペレーションの自動化により効率を高めるだけでなく、転記の際の人的ミスをなくして業務の質向上にも寄与する。classの特徴について、同社クラウドコンサルティング部長の齋藤敦氏はこう説明する。

「ipasはPCなどの操作を画像で認識します。画像認識技術でキー



代表取締役社長 阪口琢夫氏
クラウドコンサルティング部 部長 齋藤 敦氏

マに近い論文を多数読み込んでいます。通常、論文はアブストラクト（摘要）と詳細な本文に分かれており、アブストラクトに目を通して研究テーマと関係がありそうなら本文を精読する。しかし、アブストラクトだけでは判断しにくいこともある。「関係がありそう」と思って読んだものの、まったく別の研究だったということもある。そこで、classの出番だ。

「classが担当するのは前さばきです。知りたいテーマに関係のない論文をあらかじめ取り除くことで、精読が必要な文献の量を減らす。これにより、研究者は有用な論文のみに集中できます。研究の効率と質の向上をサポートする仕組みといえるでしょう」と齋藤氏。

classはすでに、製薬会社の研究部門などで活用されているという。

将来的には、ipaaSとclassを組み合わせた活用も視野に入る。

AI機能を持つclassが判断プロセスを担うことで、非定型業務と定型業務が混在するプロセスの自動化も可能になる。

ロボティクスやAIは、今後のオフィスワークを大きく変えるだ